

SORACHI STANDARD

空知基準

毎日毎日、「声出せ!」「足動かせ!」などと怒鳴りながら、そしてそれでもなかなか声が出ず、足も動かない現状があり、顧問はといえばそんなチームの現状にイラつきながらも、ふと「だって、こいつらは知らねえんだからしょうがねえよなあ」と、諦めてしまいそうになる自分を必死で鼓舞している。

小さな井戸の中から一步外に踏み出すだけで、世界の風景は全く違って見えるものだ。そしてそこには、井戸の中の常識とは全く違うテニスがある。だからこそ岩東男子硬式テニス部の2人の2年生と9人の1年生にとって、全道大会の出場権を得ることは、井戸の外の世界を知るというただその一点において、特別な意味があった。しかし、実はその全道大会だって、次のステージのための小さな「予選」でしかなく、もう一つ上には全国大会（全国選抜高校テニス大会）というステージがあって、今のお前たちには及びも付かないプレーが行われているのだということにも思いを廻らせてほしいのだ。

今年の全米オープンでは、復調を遂げたマリア・シャラポワが活躍したけれど、彼女が1球ごとに、どうしてあんなに大きな声を出すのかについて考えてみたことがあるだろうか。全身の筋肉の無駄な力みがボールに伝わらないように、インパクトの瞬間に息を吐き出すことは高校生でもやっていることだけれど、だからと言って、別にあんなに大きな声まで出す必要はないんじゃないかと思ってしまう。しかし、それは私たちの住む井戸の中からは、彼女の見ている世界が見えないことの証拠でもある。

一足跳びにシャラポワの世界基準 world standard で考えよと言うのではない。ただ、せめて一步でもこの狭い井戸を抜け出した視点から世界を見てほしいのだ。そして、今、お前達が持っている物差しが既に使い物にならなくなっていることに思い至ってほしいのだ。例えば、空知にはスプリットステップの概念さえ持ち合わせていない選手がたくさんいる。それで試合に勝ってしまったりする者もいるから、なお質が悪いのだけれど、プレーそのものに留まらず、声の出し方、ルールの知識やマナー、そしてボールの拾い方、応援の仕方まで、空知の基準は全道に通用しない。一方で、毎年全道大会に出場しているチームは、全道基準という物差しを既に手にしている。その物差しで計って考え、学び、その物差しを使って練習して試合に臨むことができる。この差は大き過ぎるのだ。

せっかくの全道大会、そりゃあいい試合をしたいし、できれば勝ちたい。しかし、そんなことよりずっと大切なことがある。それは、空知基準で全道大会を戦うことなど到底叶わないという現実から目をそらさないこと。そして、そうやって、ピカピカの新しい物差しを手に入れることである。

クソ暑かった夏、真っ黒に日焼けして汗を流しながら、成功を信じ、必死に頑張っ、やっとのことで勝ち取ったこのチャンスを、お前達はまさか無駄にはしないでだろうな。